

あとがき

世界宗教というのは、前近代に通用する言い方で、近代以降は、キリスト教やイスラム教のみならず、仏教それも上座仏教さえも、ネイションやエスニシティを越えるのは不可能に近くなる。本ワークショップを通じて、その感を改めて強くしました。それは、そもそもこうした問題意識がうまく説明できなかったと思えたからです。ネイションが自然化され、これが私たちの宗教意識を規定していることに思いが及ばない。宗教の性格・性格を説明するさい、前にどうしてもネイションの名を付けてしまうのです。まさに、近代社会がこれによってかたちづくられてきたことの証しがここにあります。

歴史学界にあっても、思考の様式や言葉の使い方がネイションにとらわれていることに無自覚で、いまだに客観的、中立的という言葉が、何の抵抗もなく受け入れられています。あつたように描く、真実さえ描き出していけば、そのことの意味を問う必要はないという考え方です。ある場合には、学問の自由とか基礎研究という言葉で、職業的研究者としての責任が回避されています。そのため、例えば、イギリス人やフランス人なる観念が、一九世紀以降に形成されたといいつつ、臆面もなく一四世紀から一五世紀にかけての百年戦争が、イギリスやフランスという言葉を使って描きだされています。

言語論的転回や「想像の共同体」論が提起したことが何であるかを理解することと、これによって自らの研究を相対化することは、別のこととして理解されていることがよくわかります。それほど、ネイションの呪縛は、強くて深いということなのでしょう。もちろん、こうした一九八〇年代に起こった「パラダイム・チェンジ」を受け入れない考え方もあります。その場合でも、自らの立場に自覚的であれば、これはこれで問題ありません。もっと討論の時間があれば、本ワークショップに向けて提起した、ネイションというものを相対化する上において、宗教がどのように貢献できるかという問題意識に対して、こうした立場から、明確な批判的意見が出されたのではないかと、悔やまれてなりません。

ただ、三人の先生のお話しや総合討論でのやりとりを聞いて、近代になり、世界宗教がネイションの宗教になってしまったのは、宗教を戒律の実践から切り離し、学問として考えたところに問題があったように思えてきました。ネイションの発生と軌を一にして出来上がった宗教文献学に傾倒し、修行や実践の問題から離れ、宗教を頭のなかだけ、つまり精神の問題として考えるようになったからではないかと。これは、パリ語という神聖言語ではなく、いわゆる土着語で伝典が生み出されるとともに、ナシヨナリティやエスニシティで当該地域の非仏教的要素も説明され、戒律とは異なる実践が、仏教の名のもとに正統化されていくのと無縁ではないように思えます。

こうなると、たとえば僧伽（比丘集団）が政府の方針に反対したとしても、それは特定ネイ

シヨン内のことであつて、そこにトランスナショナルな志向を認めることは困難になつてしまします。前近代あるいは植民地開始期には、仏教を守るために出家者は立ちあがりました。しかし、これが植民地中頃から、国民や民族を守るための運動になつてきたからです。

戒律の実践であれば、それを行つてゐるか否かということしか問題にならず、これらは個人の問題であり、集団を特徴付けるものとはなりえません。タイ人であれ、ビルマ人であれ、日本人であれ、戒律にそつた行いに大した違いはなく、そこにはできた、できない、の判断があるだけで、文化とか民族性とかが入り込む余地はありません。しかし宗教を教学で捉えるようになると、その意味づけが問題にされるようになります。一つの思想となり、集団的に受け入れられ、観念の中で共有し、「我われ意識」の核となつていく。土着語によつて文字化され、そのテキストが及ぶ範囲内での均一化が進み、新しい教学、固有の思想として、これがナシヨナリティやエスニシティによる影響として説明されてしまふ。これはまた、その下位にあるエスニシティに食い破られていく運命にある、ということになります。

一方で、宗教とネイシヨンの関係は学問や国家のレヴェルの問題であつて、実践や個人にあつては、これと異なる様相が認められるという理解もあります。確かに上座仏教が、我われに教えてくれるものは、宗教というのは「行い」であるということでした。頭の

なかで考えても仕方ないので、行わなければ意味がないというものです。日本に住み、大乘仏教の思想を日本人として身体化した私たちの宗教にたいする態度は、頭の中で考えることが実践であったわけで、そのため容易にネイションに回収されてしまったということになります。実際に行動に移さなければ、その意味は理解できないのに、ただ頭の中で考え、その奥義を理解することに心血を注いできたのです。学問や国家を超えるカギはこの辺にあるのではないか、と思えるようになってきました。

ただ実践こそが仏教の神髄だと言っても、資本主義的精神が滲透した生活のなかで、在家はもちろん出家にあっても釈尊の定めた戒律を護持することができているのか、という問題もあるかと思えます。とりわけ実践の中心課題である寄進による積徳行為は、大きな壁にぶつかります。仏教は、そしておそらくはカトリックやイスラムにあっても、さらなる利潤を生み出すための蓄積という考え方を認めていません。出家の生活を支え、物欲の克服へ向けての努力こそが、清浄で安定した心のあり方へ導いてくれる、と教えているからです。

戒の遵守は、現在の社会を成立ならしめている言葉や意味を改変していかない、と、なかなか難しいのではないかという悲観論もあります。前近代社会であれば可能であったことが、現代の社会理念のもとでは許されません。そんなことをすれば、生活そのものが成り立たなくなるからです。しかし、作りかえるところまでいかなくても、上座仏教の戒に照

らし、日本教とか中国教とか韓国教とかアメリカ教などの姿を相対化し、我われにかかられている呪縛から逃れる道を模索することは可能ではないかと思えます。このことは、今や、ふたたび、喫緊の課題として、我われに迫ってきているのではないのでしょうか。